

パネル討論 「Society5.0 を担う人材の育成に求められること」

パネリスト：

菊池 昇（豊田中央研究所 代表取締役所長）

野村 泰朗（埼玉大学 STEM 教育研究センター代表）

寛 捷彦（情報オリンピック日本委員会理事長）

飯村 亜紀子（経済産業省大学連携推進室長）

コーディネーター：岸本喜久雄（コンソーシアム副代表）

論点とそれに対する議論の要旨は以下の通り。

論点 1： 期待される Society5.0 の姿について

- ・ 経済的発展と社会的課題の解決が両立し、人間中心の社会になることが期待されている。
- ・ そのような社会では、バラバラな物やことが繋がり、人も物も「多能工化」する。そして、人々は自分が得意なことをそれぞれ為すことで成り立つ社会となることが期待される。
- ・ 社会的課題を考え、それを「なんとかし」、「ちゃんとできる」人が担う社会が想定される。
- ・ イノベーションを促進するには、レギュラトリー・サンドボックス制度（「走りながら考える」といった仕組み）の導入などが必要ではないか。
- ・ 一方で、ユニバーサルデザインの考えや、貧富の差を助長しないような仕組み作りが求められる。

論点 2： 実現に向けて必要とされる人材像と育成、各セクターの役割

- ・ 人々の基礎的な素養としての STEM 教育の充実が必要である。それを担う指導者の育成も必要である。
- ・ 社会の課題に立ち向かう、気概のある人材が求められる。リベラルアーツ教育の充実が求められる。
- ・ 様々な能力を持った人材が必要とされるが、その中で想定外のことを繋ぐことができるマネジメント力を持った人材の存在が求められる。
- ・ 新しい価値創造を担う人材を育成するためには、先人の縮小コピーを作るような教育ではだめである。
- ・ 学びの意識改革が必要であり、多様な学びの形態があり得る。状況によっては、現在のような教師が不要になるかも知れない。
- ・ 多様性に対して寛容で、多様なキャリアパスがある社会に改めるべきであり、人材評価の仕組みも変える必要がある。
- ・ 人間は易きにつきやすく、エネルギーミニマムを求めがちなので、適度な刺激が常に必要である。
- ・ 大学が新しい社会作りを担うという観点から、大学はもっと新陳代謝を行うべきである。
- ・ Society5.0 として期待される新たな社会を実現していくためには、教育などの人材育成の場においても、破壊的イノベーションが必要である。

以上